

# アクティブラーニングの方法をとり入れた 社会科授業の内容構成とその実践

The Contents and Practices in Social Studies  
Including the Active Learning Methods

荒 井 眞 一

ARAI Shin-ichi

I aimed to realize advanced active learning at the teacher training seminar in Sapporo Otani University. I divided about 20 students into 4 groups. Each group studied the teaching process about the communities in Hokkaido.

A group studied on the theme of roadside station in Hokkaido. The members of the group conducted a class for the students of the Sapporo Otani High School. The students of the High School wrote compositions describing their agreeable impressions to the class.

After the class I analyzed their compositions for improving the contents of the class, and I got some indications for the improving.

## 1. はじめに

本稿の目的は、アクティブラーニング特集の1つとして、学科の特性を踏まえたアクティブラーニングの内容について考察し、その成果を実践の経過を検討することにより検証することにある。

文部科学省によれば、アクティブラーニングとは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義される。学習者が能動的に学習することにより「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことが可能になるという。さらに文部科学省によれば、このアクティブラーニングには「発見学習、問題解決学習、

体験学習、調査学習」等に加え、「教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク」等も含まれるという<sup>1)</sup>。

本稿においては、社会科教諭免許状取得を目標とする札幌大谷大学地域社会学科1年生とともに行った系列高校への出前授業の授業づくりと授業実践の経過について述べることを前半の内容とする。そしてまた、この授業実践の場においては、授業に参加した10数名の高校生たちから丁寧な感想を数多くもらうことができた。後半においては、これら感想文の記述を抜粋検討し、授業改善へ向けての指針について考察する。

## 2. 本稿におけるアクティブラーニングの内容と方法

### 2.1. 大学におけるアクティブラーニングの内容

大手予備校の河合塾は、大学選びの指針の1つとして「大学の教育力」に着目し調査を続けている。この調査において重要なキーワードとなっているのがアクティブラーニングである。

河合塾によれば、「一般的な講義」は「知識の伝達」を目指すものである。対して「一般的なアクティブラーニング」は「知識の定着・確認」を目指すものであり、「ゼミや演習におけるディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、講義時の小テスト、ミニレポートなど」がこれに該当する。さらに河合塾によれば、「知識の活用」を目指す「高次のアクティブラーニング」が存在するとのことで、これには「学生によるグループ(あるいは個人)の独自設定による課題達成或いは問題解決に向けての総合的な取り組み(PBL Project/Problem Based Learning)」などが該当するという<sup>2)</sup>。これら3者の関係を図示すれば以下のようなものになる。

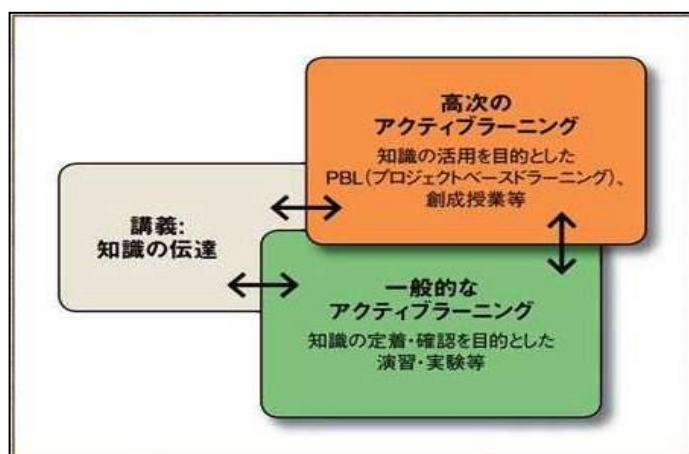


図1 アクティブラーニングの分類 (『河合塾ガイドライン』, 2011.4-5, 28 ページ)

## 2.2. 教職自主ゼミナールにおけるアクティブラーニングの方法

前節における分類に従うならば、実践報告を目的とする本稿の該当するアクティブラーニングは、「高次の」アクティブラーニングである。学生による「独自設定による課題達成或いは問題解決」に向けての「総合的な取り組み」について述べるのが本稿の中核となる。

札幌大谷大学地域社会学科では、2012 年度における学科新設以来、教員免許状取得を希望する学生に自主的な学びの場を提供するべく、時間割に組み込む形で「教職自主ゼミナール」を開設している。このゼミナールの柱の1つは教員採用試験対策であり、学年進行に伴って採用試験の対象となる各科目を筆者が順次指導している。もう1つの柱は学生の実践的指導力の養成で、この目的のために教育委員会主催の学習ボランティアへの参加、オープンキャンパス時や系列高校学生に対しての授業公開などを行っている。この公開授業にかかわる内容・方法は、上記「高次の」アクティブラーニングに該当する。

授業公開に際しては、入学当初に教職履修学生を4から6名程度のチームに分け自由に議論させ、その議論を踏まえて北海道にかかわる内容を課題とする授業の構想を提示させている。この構想が授業づくりに資するものと、ゼミ担当者である筆者が判断した場合には、授業の内容を考察させながら、必要に応じて実地の調査なども行わせた。これら調査においては、担当教員として筆者が同行する場合も数多い。オープンキャンパス時の模擬授業と系列高校学生に対して行う出前授業は、いずれも30分程度の時間内で行うもので、基本的な違いはない。ただし、高校への出前授業は高校の授業時間の50分の枠内で行うので、残りの20分には筆者による教職課程の説明が挿入される。また、高校での出前授業では、高校教員のお力添えで高校生による感想が集められ、筆者及び学生に手渡される。

### 3. アクティブラーニングとしての系列高校への出前授業

#### 3.1. 出前授業「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」の

##### 教職自主ゼミナールにおける位置づけ

札幌大谷大学地域社会学科では、2012年度の学科開設以来、オープンキャンパスや出前授業といった他の方と交わる場において、教職自主ゼミの学生（基本的には1年生を対象としている）たちに対して年に数度の公開授業の舞台が提供されている。2012年度には、教職自主ゼミに所属する学生（学科において教職課程を履修する学生と同じ）全員に授業の機会を与えることが可能となった<sup>3)</sup>。2013年度入学生についても、若干名を残しているが、過半数の学生に公開授業の機会を提供している。2013年2月時点で行われた公開授業を表にまとめれば以下の表1のようになる。

表1 教職履修学生による公開授業一覧（「O.C.」はオープンキャンパス）

年度	テーマ	舞台
2012	「カントリー・サインから読みとく北海道」	O.C.
	「貿易を通して TPP を学ぶ」	O.C.
	「タイムスリップ・イン・バブル」	O.C.
	「北海道の経済について考える ～余市とニシンから～」	O.C.
2013	「ジンギスカンと北海道」	O.C.
	「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」	出前
	「札幌ラーメン不思議発見」	O.C.

今回本稿で取り上げる公開授業「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」の授業者は、2013 年度入学生高島慎也をリーダーとする、小平祥平・品川洸太郎・馬庭千咲・山田沙姫の 5 名によるチーム（高島チーム）である。高島チームによる授業は、前年に行われた「カントリー・サインから読みとく北海道」を課題設定上のモチーフとして行われたもので、道の駅という人の集まる場所を考察の足場とすることで、様々な地域性をとらえることを試みたものである。

学科における年間行事のスケジュールは、2012 年度と 2013 年度では異なる。それゆえ、オープンキャンパスの場で公開授業を行う回数が 2013 年度には若干減少した。しかしその一方で、高大接続の一環として、2013 年度には系列校である札幌大谷高校での出前授業が行われることとなった。前節でも述べたが、出前授業の場では高校生から真摯な感想をもらうことができた。それゆえ、高島チームによる公開授業は、他の公開授業よりも授業課程の検討を行うことが容易である。

### 3.2. 出前授業「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」の概要

本節では、高島チームによって行われた公開授業の骨組みと内容を、実際に用いられたパワーポイントのスライドを用いつつ述べる。

授業を聴く高校生たちに道の駅というものがどのようなもので、どのような機能を果たすものであるかを理解してもらうために、高島チームでは「Ⅰ. 道の駅の始まり」「Ⅱ. 道の駅の『今』」「Ⅲ. 道の駅が地域で果たす役割」という3部構成を採用した。

道の駅の始まりを考えてもらう第Ⅰ部では、駅というものの原型となる駅通所について取り上げ、人々の移動に伴って駅と名のつく施設が造られたことを述べた。この後現代の道の駅の制度的な発祥や果たすべき役割について説明した。

#### Ⅰ.道の駅の始まり

—始まりは地域の声—

---

**■道の駅の始まりは...  
地域の人々**

- 広島市の地域づくり交流会  
「道路にも鉄道の駅のような、憩える場を」と提案
- 平成5年から  
「道の駅」の登録・案内制度開始




---

**シンボルマークの由来**

- インフォメーションの「i」を形取っている
- "道"のしんにょうをイメージ



#### かつて日本には...

【駅通所】(-えきていしょ)

- 人と馬が休む場所
- 江戸時代後期に松前藩によって設置された




---

**◆道の駅のシンボルマーク**




---

**■私たちの行った場所**

▼道央	▼道央	▼道央
-千歳	-黒松内	-中札内
-苫小牧	-寿都	-音更
-恵庭	-喜茂別	
-長沼	-ニセコ	▼道北
-深川	-真狩	-旭川
-夕張	-留寿都	
-奈井江	-烏牧	▼道東
-雨竜	-蘭越	-佐呂間
	-岩内	
	-神恵内	



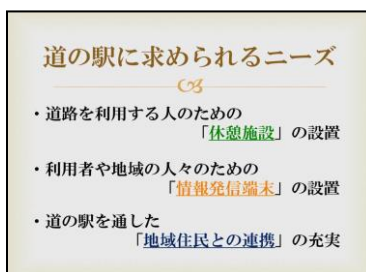
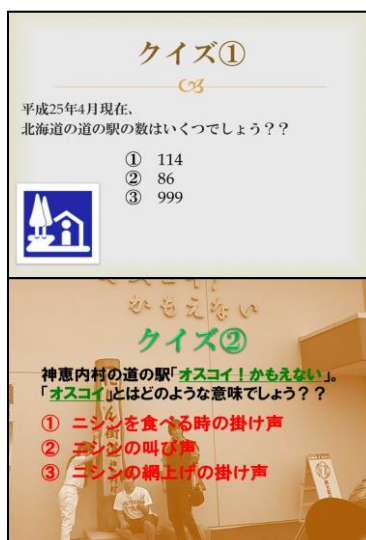
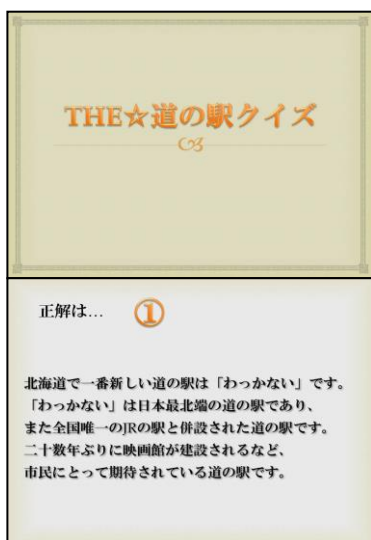


図2 「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」第I部のスライド

続いて第I部では、道の駅の特色について、クイズ形式で紹介した。



**クイズ③**

✎

大滝村の「フォーレスト276大滝」のトイレには一億円かかっているものがある！その豪華なものとは何か？

- ① ダイヤモンドが埋め込まれた便器
- ② 高級車が数台飾られている
- ③ ピアノと大理石床がある

正解は！！ ③

トイレに自動演奏のピアノや大理石でつくられた床がある。

正解は... ③



「オスコイ」はかつて神恵内で行われていたニシン漁の網あげの際に使われた掛け声。

図3 第Ⅰ部「道の駅クイズ」のスライド

続く第Ⅱ部「道の駅の『今』」では、前半で道の駅に関する3つの登録条件と国土交通省から発行される登録証について紹介した後、道の駅調べの結果典型的な道の駅と考えられた「花ロードえにわ」を取り上げた。

**Ⅱ.道の駅の「今」**

✎

Ⅱ.24時間使用可能なトイレ



Ⅲ.24時間使用可能な駐車場



■道の駅 三つの登録条件

Ⅰ.道の駅情報提供端末



登録証



道の駅には国土交通省が発行した登録証が必ず置いてある



図4 「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」第Ⅱ部のスライド

続く第Ⅲ部では、典型的な道の駅と評価された「花ロードえにわ」と他の道の駅との比較から、第Ⅲ部の題目である「道の駅が地域で果たす役割」について考察した。

授業者Aの実家のある島牧村には、「よってけ！島牧（島牧村）」という道の駅がある。島牧村では新鮮な海産物が数多く水揚げされ、ハイシーズンには多くの観光客が押し寄せる。しかし一方、この道の駅を利用する島牧村民はほとんどおらず、道の駅が地域に対して果たす役割が極めて小さなものとなっている。授業では、地域性が発揮されている道の駅のいくつかを、具体例として示した。

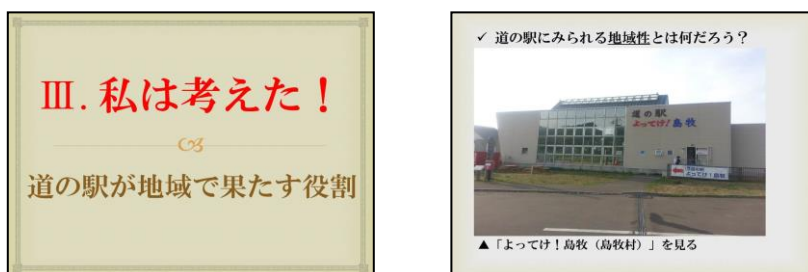




図5 「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」 第Ⅲ部のスライド

いくつかの具体例の提示の後、「道の駅は単なる休憩施設にとどまらない」「道の駅の役割は地域の活力と深いかわりがある」「道の駅はそれぞれの地域性を反映する」という3点を提示して授業を終わりとした。

#### 4. 出前授業の成果と今後の課題

以下本章では、「Ⅰ. 道の駅の始まり」「Ⅱ. 道の駅の『今』」「Ⅲ. 道の駅が地域で果たす役割」という3部構成に沿った形で高校生からいただいた感想文記述を抜粋検討する。ただし、第Ⅰ部では「道の駅クイズ」を後半に多くのスライドを割いて採用しているのでこの可否については別に検討する。

感想文を寄せてくれたのは札幌大谷高校の 1 年生 12 名である。各々の生徒には(A)から(L)という記号を付した。この授業は他の教員による出前授業を並列で行われているため、1 クラスの人数には満たない数となっている。以下、内容構成に沿った感想文記述を抜粋検討しつつ、最後に総括的な感想文記述について検討する。

## 第 I 部

第 I 部に関しては以下のような感想文記述が共通に見られた。

- ・昔の日本には、「駅てい所」があつて、人と馬が休む場所で、江戸時代に松前藩によって設置されたということを知りました。(A)
- ・道の駅になる前は、駅てい所ということを知り、しかも、江戸時代の事でとても驚きました。(D)
- ・道の駅にシンボルマークがあるのを知らなくてしかも由来が聞いたのはとてもためになりました。(D)
- ・道の駅ははじめ人と馬が休む場所だったと知って、そんなに昔からあるものだったのかと思いました。(E)
- ・今回は道の駅の歴史やマークなどについて知ることができてとても楽しい授業でした。(F)
- ・道の駅の歴史についてで、駅逋所という名前で道の駅のようなものがあることを知りませんでした。(J)
- ・「道の駅」の中でとても強く印象に残っていることは、道の駅の発祥の話です。(K)

上記 7 つの感想はすべて、駅逋所という施設に関するものである。これに関しては、事前調査の段階で恵庭市島松に現存する遺構を調べていた。授業には反映されなかったが、生徒たちの興味関心に従うならば、

何らかの形で補足が必要と思われる。また、第Ⅰ部に関して見られた乾燥に多かったのは以下のようなシンボルマークに関するものである。

- ・インフォメーションの「i」と道のしんによろ「しん」をイメージしていることを知れてよかったです。(A)
- ・道の駅にシンボルマークがあるのを知らなくてしかも由来が聞けたのはとてもためになりました。(D)
- ・インフォメーションの「i」を形取っているということや、道のしんによろ「しん」をイメージしているマークだとは知らなくて驚きました。(E)
- ・道の駅のシンボルマークが道という字を表しているのは知らなかったです。(H)

上記感想文記述からは、道の駅のシンボルマークの由来を知ることができたことが好意的にとらえられていることが把握される。

## 第Ⅰ部「道の駅クイズ」

「道の駅クイズ」に対して筆者は学生らによる授業づくりの段階で若干の疑問を感じていた。授業進行の上でクイズという形式を採用する必然性が、準備段階では認められなかったからである。しかし以下の感想文記述からは異なった見解が示されている。

- ・クイズを通して、北海道にどれくらいの数の道の駅があるのかなども知れたのでよかったです。(A)
- ・クイズや豆知識も交えてあるから飽きがないし、自分も参加する形になるからタイクツしない。(C)
- ・途中のクイズで出てきたトイレにあるピアノは見たことがあったの

で、すごかったなと思いだしました。(E)

- ・道の駅クイズは緊張でかたまっていた空気を少しやわらげてくれてそのあとの講義はリラックスしてお話を聴けたので、内容がよく入ってきました。(I)
- ・道の駅クイズは、難しいものもありましたが、息抜きにもなってよかったです。(L)

上記記述を総括するに、クイズ形式は生徒たちに好意的にとらえられている。長そうな授業の途中にクイズという形式が入れられることによって、生徒たちには楽しい「息抜き」になったようである。

## 第Ⅱ部

第Ⅱ部に関する記述は少なく、以下の2つであった。

- ・道の駅の3つの登録条件を知ることができて、必ず道の駅には登録証があることも知れてよかったです。(D)
- ・道の駅の今では、おもしろい道の駅がありました。(J)

授業全体の中核をなす部分が第Ⅲ部における「地域とのかかわり」であることを考慮するならば、第Ⅱ部に関する記述が少ないことはさしたる問題ではない。しかし、第Ⅱ部の後半で「花ロードえにわ」を道の駅の典型例として取り上げたことが、第Ⅲ部とのかかわりの中で表明されている記述が見られない点には課題を残したといえる。

## 第Ⅲ部

道の駅と「地域とのかかわり」について知ってもらうことが授業の目標であった。以下の感想文記述の数々からは、この目標が達成されたこ

とが把握される。

- ・ただ人々が休暇するだけの場所だけではなく、地域と住民との深い  
かかわりに気づいていくための重要な役割を、道の駅は持っている  
のだなと思いました。(A)
- ・「地域住民との連携」道の駅にこのような意味があると思いません  
でした。(D)
- ・観光客ももちろん来てくれた方がいいけれど、地元の人も来ないと  
その地域の活性化はあまりよくできないと思うので、何かもっと工  
夫をしなければいけないと思いました。(E)
- ・ニセコ町の道の駅では、地域で採れた野菜や果物などを販売してい  
るということでした。これは地域にとっても大きな意味があると思  
いました。(G)
- ・その地域でしか出すことのできない特色を出すことによって、その  
地域の活性化にもつながるのではないかと思います。(G)
- ・ただの休憩所ではなく、地域と深い結びつきがあるということをま  
とめて、大変だけどとても楽しそうでみのりのある学習ができるん  
だと思いました。(H)
- ・道の駅のニーズは地域住民との連結もあるので、地域住民のことを  
一番に考えて、それから、観光客のことを考えるべきだと思いま  
した。(J)
- ・今まではなぜ道の駅にはこんなに多くの人々が集まっているのかと  
思っていたのですが、今日のお話を聞いて道の駅の大切さ、地域の  
活力、発展をもたらしているんだと思いました。(K)

内容的な点における目標達成は上記記述から確認される。今後は、こ  
の内容に関して生徒たちが考察を深められるような授業構成の工夫が求

められるだろう。

## 総評

総括的な感想文記述には、3つの傾向があるようである。1つは、以下のような授業に対する好意的な評価である。

- ・ 内容が身近なものだったし、私の地元の当別にも似た施設があるので共感だとか理解のしやすい題材でした。(C)
- ・ また、身近な題材を使った授業を受けてみたいです。(C)  
写真も楽しそうだったし、話の内容もしっかりまとまっていてわかりやすかったです。(I)
- ・ 大谷大学の生徒の皆さんの発表から、普段何気なく利用している道の駅には様々な役割があることがわかりました。(L)

2つ目に見られた傾向は、以下のような生徒たちの意識の変化である。

- ・ 今回の話を聞いて、とても行ってみたくくなりました。最後のまとめで言っていた、道の駅とは地域そのものを反映させる重要な役割も持っているんだなあと思いました。(A)
- ・ ただの休憩所が、地域の人びとのつながり、活性化に大きくかかわっているときいて、私も近くの「道の駅」を利用してみたいと思えました。(B)
- ・ 今まで、ただ休憩するところだと思ってたのですが、今回の話をきいて道の駅への思いがかわりました。(D)
- ・ 道の駅での地域性からは、様々なことが読めるので、今後道の駅に行った時には注目したいと思いました。(G)
- ・ 僕はさまざまな道の駅に行ったことがあるんですが、皆さんの調べ

たことや、考えなどを聴いて考えてみると、前までとは違ったとらえ方、考え方ができるなと思いました。(K)

上記記述からは、道の駅にかんする知識を得たことによる印象や考えの変化が見て取れる。この一点をとっても授業が成功裏に終わったことは明らかであるが、さらなる内容の改善によりこの数を増加させることは不可能ではないだろう。

3 つ目の傾向は、少数ではあったが以下のような感想文記述が見られたことにある。

- ・印象的だったのは大学生の方々が自分たちでこの講演を考えたということです。(B)
- ・教職自主ゼミは何もないところから今回のような授業を作ると知ってすごいと思いました。(E)

一連の授業作成は、決してすべてがスムーズに進んだわけではない。道の駅というものをどのような切り口でとらえることがふさわしいのかという点にかんしては、決定までに長い期間を要した。最終的な授業の中にこのような苦心の跡は一切見られないはずではあるが、生徒たちには授業づくりの難しさということがそれなりに伝わっていたようである。

[註]

- 1) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」『用語集』, 2012. 8. 28, 37 ページ  
([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf))
- 2) 河合塾編・著「大学のアクティブラーニング」『河合塾ガイドライン』, 2011. 4-5, 27 ページ

3) 2012 年度に行われた公開授業の概要は、『地域を学びの場とした教職実践のあゆみ 第 1 号』（札幌大谷大学社会学部地域社会学科編・著，2012）にまとめられている。

[引用文献]

中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」『用語集』，  
2012. 8. 28

河合塾 編・著「大学のアクティブラーニング」『河合塾ガイドライン』，2011

（あらい しんいち，札幌大谷大学社会学部准教授）